

属協和病院。平成3年1月から1年間に在局した。その後は帰国せず更に京都府立医大に移り研修した。主人と幼児を中国に置いての留学と聞き、その熱心さに驚いた。

4. 劉 培嬌さん

昭和14年1月5日生まれ 出身校日中友好病院。平成元年7月から約半年の来日。短期間のため印象が薄い

5. 喻 唯民さん

昭和17年7月20日生まれ 出身校中日友好病院。



昭和60年10月から約4年間来日。町を散歩中飼犬に噛まれたと言い狂犬病を心配し大さわぎしたの思い出す。当時日本には狂犬病は発生していないと説明したが納得しなかった。人類遺伝研究所に所属していて、小児科は外来診療のみ見学に来ていた。故松本教授の御指導で学位を取得したと聞く。(写真7)

7) おわりに

筆者は金沢医大小児科に初代故吉田清三教授の後任として16年9ヵ月お世話になった。筆者の後任には高橋弘昭教授、現在は厚川太教授となり15年以上

が過ぎている。初期の医局の卒業生も還暦に近い。それぞれ各地で活躍中である。若い日に共に過ごした思い出は常に脳裏を去来する。ケマールさんを追憶し、中国の留学生の方々についても記した。

(2010.6.15 記)

(資料につき御教示頂いた、国際交流センター 古本郁美さんに深謝致します)

(写真7) 外来にて
ナース達と右端 張さん、左から3人目 喻 唯民さん

報告

金沢医科大学病院「女性総合医療センター」の発展に向けて

赤澤 純代

(金沢医科大学21世紀集学的医療センター講師・
女性総合医療センター副センター長 平成4年卒業)

金沢医科大学病院に「女性総合医療センター」ができるまでのことについて、この北辰同窓会報に書かせていただきたいと思います。

私は本学卒業後2年間、金沢医科大学病院で内科研修を受けたあと、当時所属していた循環器内科竹越教授から「東京へ行ってみないか」とのお誘いがあり、生まれも育ちも石川県で県外へは出たことがない自分でしたが、東京への憧れは強く二つ返事でこのお話を受けました。

しかし、行った先は東京大学第三内科循環器グループでした。研究目的の内地留学でしたが、ものすご

いカルチャーショックを受けたことも事実でした。石川県から出たことがない田舎育ちの私は、「東京で羽をのばせるんだわ!」と希望に胸をふくらませて望んだのですが…。行った先は東京大学、中でも研究では世界のトップを走っているところで、分子生物学の主流の中の主流でした。まだ研究が何なのかかわからない私には、そこで使っている言葉さえ最初は理解できませんでした。しかし、知らぬが仏というか、無ということとは幸せなことで、怖いことは何もありませんでした。一からこつこつと勉学をすることで研究の楽しさを教えていただきました。



(図1) 女性総合医療センターの現況

研究活動も一時区切りがついて論文もまとまりました。日本循環器内科学会などでCPIS賞などをいただいたり、Nature、Geneticsなどにも論文が掲載されたりして順風満帆でしたが、母校に帰ってからの苦労の種は山積しておりました。何かを生み出すための環境の大切さを痛感し、これまでの沢山のすばらしい仕事をして来た先輩たちも同じ苦労をしたのだと気づいたのでした。

その後、第二児の妊娠、出産、育児が続き、仕事も思うようにできない中、ある幹部の先生から、女性外来を開設するというミッションをいただきました。そして苦労をすること7年、ようやく女性外来から総合的なメニューを揃えた「女性総合医療センター」へと大きく発展することができました。(図1)

母校に帰り、人により傷つき、人により癒され、人により支えられていることに気づき、やっと今があることに気づいたのでした。母校での苦労のお陰で一人では何もできないことをいやというほど学び、沢山のマンパワーと理解がとても重要なことを教えていただきました。権力の闘争もすばらしいですが、やはり人間です。幸せと思いながらお仕事ができることが一番です。

2002年の女性外来開設時のボスは竹越教授、当時の理事長は小田島先生、女性外来の開設場所は総合

診療科の神田教授のもと。さらにいろんな出来事があって、21世紀集学的医療センターに移籍となり、ボスは松井忍教授になりました。

最初の「女性外来」の立ち上げのメンバーは、現在、福島県立医大性差医療部に勤務の今村理子先生、厚生労働省医政技官の鴨田佐知子先生で、伊藤透先生から原稿依頼されて「医科大どおり」にも紹介させていただいたことがあります。(図2)

これまで信用していたことが劇的にひっくり返るここ10年でした。最後は、山下理事長を始め松井教授のもと心の

通じたスタッフや友人、家族が支えになりました。沢山の「ありがとうございます」を伝えたいです。

2005年に金沢医科大学には、患者さんを中心に医療側の知恵を集結して診療科の壁を取りはらった最高の医療を提供しようという試みのもと「21世紀集学的医療センター」ができました。当初その中の生活習慣病センターの中で女性外来を続けさせていただいておりましたが、高度先進医療が進む中、ジェネラリストから「性差医学」のスペシャリストの視点を持って集学的に連携することが大切ということを経験を通して再認識しました。

女性は必ず妊娠、出産、子育てをしなければならないというライフステージに遭遇せざるを得ません。女性医師でも男性医師でも同じで、年齢は20代後半から30代と仕事が一番忙しくキャリアを磨く時期とダブルです。私も3人の子供がいます。私の場合は理解のある上司、家族、夫やスタッフの皆さんに支えられてはじめて、自分自身の自己実現とはかなり離れてはいますが、仕事を続けることができました。

そこで考えたのです！女性外来を受診する患者様は不定愁訴が多いのですが、状態が急変するという方は少ない。それですから、大学病院に勤務しながらキャリアを継続しておき、女性医師のライフステージでの通過点として可能な勤務形態で「女性外来」で

金沢医科大学病院医療最前線

21世紀集学的医療センター 女性外来

より良い女性の人生のために

21世紀集学的医療センター
センター長 松井 忍

Better Life for Women

■女性外来とは？

女医さんが診る外来と思われがちなのですが、実はしっかりとした背景があります。性差医療Gender-specific Medicine (GSM)とは、男女比が圧倒的に一方の性に偏っている病態(痛風は男性に、膠原病は女性に多い)、発症率はほぼ同じでも男女間で臨牀的に差を見る病態、生理的・生物学的解明が男性または女性で遅れている病態などの、診断・治療法・予防を目的としています。性差医療・東洋医学・統合医療視点の導入により性差を含めた横断的な診療を行うことで、心身一如とした患者さま側の満足度が高い医療を提供したいと考えております。



左より 松田 奈津 今村

担当医の共通の専門
性差医療・漢方薬治療・更年期症候群・
アロマセラピー・産科医

赤澤Dr◎高血圧・糖尿病など生活習慣病・
内科認定医・健康スポーツ医

正しい知識を学んで、ライフスタイルを変えることは女性の健康・遺伝子環境相互作用として次世代の遺伝子継代にまで影響を及ぼすと考えられます。家族への教育・啓蒙のため、正しい遺伝子継代も含めて女性がキーパーソンである事を再認識し、若いときより正しい医学情報を学び、美しく老いることを目標とし、健康づくり

のパートナーとして、健康で幸せな人生を歩めるように大学病院ならではの医療・知識を提供していきたいと考えています。

松田Dr◎メンタルケア・肥満の漢方治療・
男性更年期・精神保健指定医

最近外来で、「何をやっても楽しくない」「更年期かもしれない」「体調不良を強く感じるけど、こんな訴えで病院に来ていいの？」などの問題でお困りの方をたくさん拝見します。自分の時間や自分の受診を後回しにして、仕事や家事、育児に追われている女性のために、最適な医療を提供するために、診療しております。

今村Dr◎メンタルケア・腎臓内科・内科認定医

私達は一人一人自分らしく生きる為に、そして幸せになるために生まれてきたのにいつの間にか たくさんの不満とかストレスになる事柄を抱えながら生きてしまっています。感情を変えれば現実も変わってきます。心のハッピーは身体のハッピーにもつながります。心を癒すお手伝い、そして真の健康を一緒に目指していきましょう。

共通した治療方法としては、従来の西洋薬による治療に加えて、東洋医学療法やアロマセラピー療法など、心と身体両面から治療していきます。運動担当医、看護師、栄養士などをはじめとしたチーム医療で診療させていただいております。みなさんお気軽に受診ください。全て予約診療で行っています。

詳細は、病院へ問い合わせください。
(内線電話:5611)

(記:生活習慣病センター 赤澤 純代)

(図2) 女性外来開設当時の「医科大どおり」の紹介ページから

の診療に従事していただくという方法、これは引き続き元の科のスペシャリストとしてすぐに復帰できる道として、すべての女性医師に受入れていただけなことではないかと思ったのです。

私どもの女性総合医療センターは、臨床、研究、女性医師支援の3本柱で対応できると考えています。

東京女子医大ではとても良いシステムがございますが、金沢ではまだ遅れていました。その意味でも女性医師でジェネラリストになっていくのか、スペシャリストの道を選ぶのか、はたまた、女性の第三の道を選ぶのか…。金沢医科大学女性総合医療センターは、ライフステージにおいて色々と悩んでいる女医さんに対してスクランブル交差点の役目を果たせるのではないかな、と思いをはせてもいます。

さらには、男性医師の勤務の環境の改善のためにも、短時間雇用システムの女性医師の参画はとても重要になります。現在、社会の雇用システムや、子育て介護などインフラが、働く者のためにはまだ制

度も財政も整っていない過渡期にあります。だからこそ、地方における女性総合医療センターの役割は大切になるのではないかと考えています。まだ、私自身手探りの中、人生を歩んでおりますし、混乱して迷惑をかけてしまったりしております。沢山の卒業生や同窓の先生から叱咤激励をいただきながら、新しい何かを作っていければと思って日々をすごしております。

医師以外の様々な方々に支えられまた、卒業生の沢山の先生、石川県医師会では、近藤邦夫先生の女性医師支援のお話をいただいて活動する場を作ってくださいました。北辰同窓会の坂本先生、伊藤先生、吉田先生、大島先生などの皆さんに女性医師の支援組織として北辰同窓会に水月会を参加させてくださいました。本当にうれしく心より感謝申し上げます。

北辰同窓会会員が、母校である大学や病院で色々と活動できる場所はたくさんあると思います。もっともっと交流を深めて行けるよう祈っております。

寄稿

金沢医大北辰同窓会の皆様へ

中村 はるね

(はるねクリニック銀座院長兼理事長 昭和55年卒業)

この度北辰同窓会常任役員会にて、名誉ある同窓会賞にご推挙いただきました事に、心より感謝と御礼を申し上げます。あいにく7月10日の同窓会総会には外来の他に二件の講演会が入り、金沢に飛べない事を深くお詫び致します。

鳥小屋以外何もなかった内灘砂丘の学び舎から数えますと、余命の半分以上が過ぎ、若さがまぶしく羨ましい歳になりました。その後「きけ わだつみのこえ」の編者であり産婦人科医の父のあとを追って、東大分院の産婦人科医局に飛び込んでから丸30年。女医と都会の真ん中のクリニック経営、障害を持った父母や娘を守る事、わだつみ平和文庫の維持などは、筆舌に尽くしがたい日々でございます。不眠不休は体に悪いです！。ソフトランディングでも良かったはずなのに…と思うと医療崩壊にさせていった

のは私達の責任であるのかもしれません。

しかしここまで走り続けてきた理由は、毎日今も、BSTで学んだSOAPが基盤になっています。つねにAssessmentし、Planをたてる。百回転べば百一回起き上がる。患者様のためには身を惜しまず診療し、書きとめてパンフレットか本の出版にする。今はボロボロですが、走りながら休憩するワザが必要になりますね!!

今欲しいもの:のんびり出来るところでシニア語学留学です。誰か銀座で院長していただだけませんか？お待ちしております。

そして改めて、この受賞に心から御礼申し上げますとともに、金沢医大の永遠の発展をお祈りし、また寄与致したいと考えています。

2010年7月10日土曜日